

魅力ある農業を目指して

橋本市を含む高野山麓地域は、かつて高野山の食料供給地としての役割を担っていました。その頃に高野山で提供されていた精進料理には本市の農産物が使用されていた可能性が高いと考えられています。しかしながら、近年における本市の農業は、耕作放棄地の急増や新たな担い手の不足など、年々衰退が進んでおり、深刻な問題となっています。

このため市では「高野山麓精進野菜」による農産物の産地化・ブランド化を行い、農業を取り巻く課題解決に向けた取組みを行います。【農林振興課】



「高野山麓精進野菜」として農産物をPR

本市の農産物の特徴を生かす

市内産の農産物に付加価値を持たせるには、他産地の農産物と比べて独自性や優位性が必要です。そこで本市の農産物の特徴を生かし、「高野山麓精進野菜」としてブランド化し、PRを行います。

高野山麓

精進野菜

おいしさ

- 少雨温暖な瀬戸内気候と、気温差が大きい内陸性気候の2つの特徴があり、糖度の高い農産物を生産しやすい。
- 都市部へのアクセスが良く、新鮮な状態で農産物を供給しやすい。

安全・安心

- 農家に負担の少ない方法で低農薬栽培を行うなど、安全性に配慮。
- 農家の顔が見えるPR方法で消費者の安心につなげる。

歴史・伝統

- 橋本市は「高野山」の麓にあり、かつて高野山の食料供給地であったと考えられている。
- 高野山で供されている精進料理は健康食としても注目されている。

農産物を

ブランド化

本市における農業の現状と課題

耕作放棄地の増加

本市の農業は非常に深刻な状況にあります。1年間作物が栽培されず、今後も栽培の予定がない耕作放棄地が山間部だけではなく住宅地にも多く発生しており、今後も増え続ける予想されています。また、耕作放棄地は、市街での有害鳥獣の発生や、災害発生の要因となります。

なぜ耕作放棄地が増えるのか

農林業センサスの結果から、耕作放棄地の増加要因が見えてきます。

・農家の高齢化

農業経営者の約80%が60歳以上となっています。高齢化の進行に加え、後継者や新規就農者がいないことが農家の労働力の低下や、農家数の減少につながっており、耕作放棄地の増加の一因となっています。

・農業収入の低迷

農産物販売金額300万円未満の農家が90%近くを占めています。これは農産物の市場価格の低下による販売金額の減少や労働力低下による耕作面積の減少が影響していると考えられます。また、兼業農家率も県平均の52.2%を10ポイント上回る62.9%であり、農業収入の不安定さが伺えます。

「高野山麓農産物産地化協議会」を設立しました

農産物の産地化とブランド化を併せて行なっていくためには、行政だけではなく、生産者、JA、販売者などの関係者全てが共通認識を持って協議を進める必要があります。加えて、生産・販売・流通など、それぞれの分野において、高い専門性が要求されることとなります。

このことから、平成31年3月1日「高野山麓農産物産地化協議会」を設立し、基本方針や行動計画を示したブランド戦略を構築するとともに、部会を設置して専門性の高い分野について審議します。

農業を魅力ある仕事に

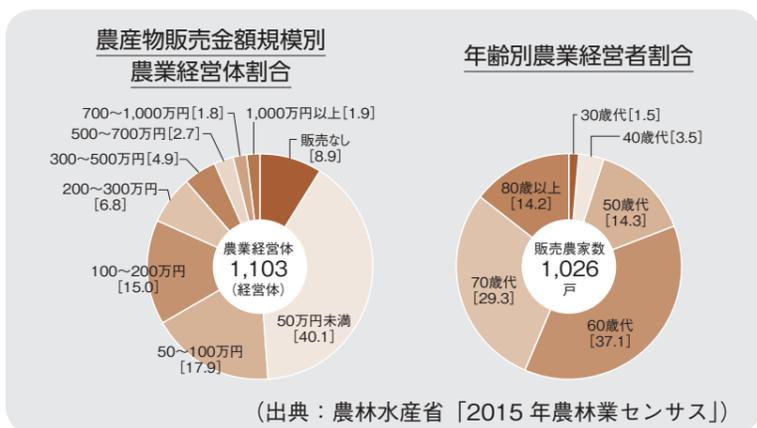
今後、県やJAなど高い専門性を持つ機関と連携しながら栽培基準を策定し、栽培説明会、試験栽培を経て「高野山麓精進野菜」ブランドの産地化を目指します。

農産物に付加価値を持たせることで農家の収入を向上させ、仕事としての農業の魅力が高まってくれば、担い手不足の解消や耕作放棄地の発生防止へとつながっていくことが期待できます。

「高野山麓精進野菜」が本市における農業振興の起爆剤となるべく、これからも関係機関と連携しながら取組みを進めていきます。

安定した収入のある農業へ

耕作放棄地の解消や新規就農者の確保のため、県や紀北川上農業協同組合（以下・JA）などの関係機関と連携し、対策を行なってまいりましたが、現時点では解決まで至っていません。新たな担い手を確保するためには、農業が安定した収入を得られる仕事として成り立つ仕組みづくりが求められています。



高野山麓精進野菜の定義

本市の農産物の独自性・優位性を明確にするため、協議会において「高野山麓精進野菜」の定義を決定しました。

- 定義1** 精進料理の食材として使うことができる野菜
- 定義2** 橋本市内で生産された野菜
- 定義3** 減農薬・減化学肥料などの栽培基準を満たす野菜
- 定義4** 高野山麓精進野菜栽培講習会に参加した生産者の野菜

定義の詳細については、栽培講習会などでお知らせします。栽培講習会の開催日時については、決まり次第、広報はしもと、市ホームページなどでお知らせします。

